

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 25 日現在

機関番号：34315

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21730433

研究課題名（和文）デュアル・キャリア社会の条件としての「柔軟な結婚」についての実証研究

研究課題名（英文）Investigation of the “flexible marriage life” as a condition of dual carrier couple society

研究代表者

筒井 淳也（TSUTSUI JUNYA）

立命館大学・産業社会学部・准教授

研究者番号：90321025

研究成果の概要（和文）：

日本が直面する最大の問題の一つである少子化の解決の方策として、ワーク・ライフ・バランスの推進が提起されてきた。本研究は、家庭内分業と雇用という2つの側面から、ともに家計を支えあうデュアルキャリア夫婦の可能性について検討した。家事分担についてはスキルや働き方の影響が無視できないこと、雇用については単にフルタイムやパートといった雇用形態のみならず、セクター（公的・私的）の区分による違いも大きいことを見出した。

研究成果の概要（英文）：

“Balancing work and life” has been promoted partly as a solution to the problem of low birthrate in Japan. In this study, conditions of dual career couples are explored from two different aspects: sharing of housework and female employment.

交付決定額

（金額単位：円）

|        | 直接経費      | 間接経費    | 合計         |
|--------|-----------|---------|------------|
| 2009年度 | 600,000   | 180,000 | 780,000    |
| 2010年度 | 1,300,000 | 390,000 | 16,900,000 |
| 2011年度 | 400,000   | 120,000 | 520,000    |
| 年度     |           |         |            |
| 年度     |           |         |            |
| 総計     | 2,300,000 | 690,000 | 2,990,000  |

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：家族、人口、雇用、家事分担、ワーク・ライフ・バランス、

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 近年の日本における深刻な婚姻率低下・少子化については、主に「女性が結婚・出産に伴ってフルタイムの仕事を継続できないこと」が原因とされており、そういった認識に則って「ワークライフ・バランス」を実現する条件についての研究がさかんになされている。そこでキーワードになっているのは「働き方の柔軟性」である。つまり、労働時間、場所、契約形態を柔軟化することが、ワークライフ・バランスを、ひいては男女共

同参画をもたらす、という認識が広く共有されているのである。

(2) 申請者はこういった学術的背景のもと、科学研究費補助金による「女性のキャリア形成と転職パターン：雇用均等法以後の人的資本高度化の現状と課題」（研究分担者）、東京大学社会科学研究所 GCOE プログラム「グローバル時代の男女共同参画と多文化共生」（研究・教育協力者）といったプロジェクトに参加して研究を進めているが、JGSS（日本版総合社会調査）プロジェクトや博士論文で取り

組んだ結婚行動研究の観点から、現状のワークライフ・バランス研究においては次のようなアプローチが欠如していることを指摘したい。

企業側の努力等によって「柔軟な働き方」が実現しても、それに応じた「柔軟な結婚」のかたちを人々が受け入れない限り、婚姻率の上昇には結びつかないことが考えられる。アメリカでは高学歴女性の婚姻率が低学歴女性のそれよりも上回っていることが確認されている。これは、低成長経済において得難くなった安定した収入を、(旧来のように女性が男性に求めるだけでなく)男性が女性に求める結婚意識の変化が背景に存在するからである。またアメリカやイギリスでは、妻が働いているあいだに夫が再教育・求職活動を行ったり、女性の転勤にあわせて男性が転職するようなカップルが珍しくない。これに対して日本では、男性・女性ともに「結婚においては男性上位であるべき」という社会通念が強く、このことが社会規範のレベルで柔軟な結婚の実現を阻んでいることが考えられる。「柔軟な結婚」のかたちが実現しないかぎり、いくら雇用者側の意識が変化して「柔軟な働き方」が実現しても、実質的なワークライフ・バランスに結びつかない可能性が高い。また、特に昨今のような不安定雇用環境においては、場合によっては妻が働いている間に夫が子育てや再教育を行うという結婚のかたちを想定することはきわめて重要になる。

## 2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、若年層の将来の結婚相手についての意識を調査することを通じて、多くの夫婦がともに職業人としてのキャリアを歩む「デュアル・キャリア社会」の実現可能性についての分析と政策提言を行うことである。

(2) ここでいうデュアル・キャリア社会とは、男性がメインの稼ぎ手で女性がその補助にとどまる「共働き」夫婦ではない、場合によっては女性の収入によって(再教育・求職中の)男性を養っていけるような夫婦が多く存在する社会のことである。ここで、デュアル・キャリア社会の実現のためには、企業側の変化だけではなく、夫婦の働き方に応じた柔軟な結婚を実現するための意識変化が伴う必要がある。女性が主な稼ぎ手となる「非典型的」結婚への許容度についての意識を分析することによって、ヨーロッパ社会ですでにみられるようなデュアル・キャリア夫婦が将来日本において増加する可能性について考察する。

## 3. 研究の方法

主に計量的手法を用いた実証分析を行う。

使用するデータとしては、家庭内分業についてのデータとしては筒井も調査メンバーとして参加している「全国家族調査」(NFRJ)のものを、雇用については30カ国前後の国際比較が可能なInternational Social Survey Programmeのものを利用する。

## 4. 研究成果

主な成果は平成23年度中に発表された。「平成23年度交付申請書」に記した研究実施計画では、(A)「ミクロな家庭内性別分業についての分析の結果の報告」、および(B)「マクロレベルでの「男性稼ぎ手モデル」社会の比較社会論的分析の報告」を実施する予定であった。上記2つについて、予定通り実施することができた。(A)は家族社会学会での報告、(B)は国際社会学会での報告および立命館大学での国際シンポジウムでの報告(いずれも英語)である。

成果(A)では、デュアルキャリア夫婦を可能にする基盤である公平な家事分担について、それが遅々として進まない要因を、クロスセクションデータ(NFRJ08データ)にマルチレベル分析を適用するという新たな試みによって明らかにした。主な結果として、スキルを要する家事、日常的な時間を要する家事(食事準備など)については、それ以外の家事よりも分担が進んでいないことが示唆された。

図1(家事の家庭内分業についてのモデル)に、女性の就労形態に応じて夫の相対的な家事の貢献度がどのように変化するかを示してある。たとえばパネルAは、妻の働き方にかかわらず、夫の家事貢献度が同じである場合を示している。詳しくは研究成果(<http://goo.gl/d8Raf>)をみてほしいが、妻の働き方が異なる(労働時間が長くなる)ときの夫の追加的な貢献は、家事項目によって異なっている。具体的には、食事準備に比べて掃除で相対的な貢献度が大きくなる。

結論としては、家事分担の夫婦間格差は、家事に要するスキルへの習熟度合いによるものであることが示唆されている。

成果(B)国際社会学会での報告では、ワーク・ライフ・バランスに関する国際比較分析を行い、働き方の柔軟性が性別、雇用セクター、職種によって異なっていることを明らかにした。特に、専門職による働き方の自由度が性別によって異なるという結果が導かれたことは、大きな発見であった。この成果は、2012年度中に東京大学社会科学研究所の学術ジャーナルに掲載される予定である。立命館大学での国際シンポジウムでの報告では、より広い視野から、東アジア諸国においていかにし

て「男性稼ぎ手モデル」が経済や社会の停滞をもたらさうるかを指摘した。この成果は、2012年度中に立命館大学人文科学研究所の紀要に掲載される予定である。

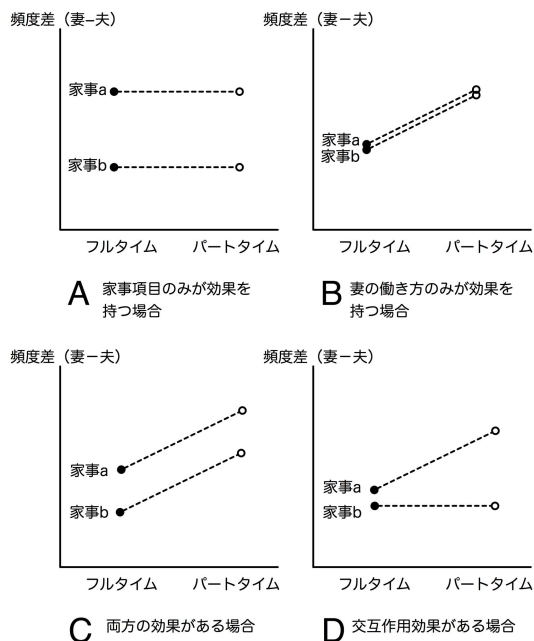


図1 家事の家庭内分業についてのモデル

なお、上記(A)は日本国内のデータを利用した分析であったが、国際比較データを利用した分析を2012年5月のアメリカ人口学会で報告した。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

- ① 筒井淳也、パネルデータの基礎的分析方法：NFRJ-08Panelの有効活用に向けて、家族社会学研究、査読無、23巻1号、2011、96-102
- ② 筒井淳也、親との関係良好性はどのように決まるか：NFRJ 個票データへのマルチレベル分析の適用、社会学評論、査読無、62巻3号、2011、301-318
- ③ 筒井淳也、日本の家事分担における性別分離の分析、田中 重人、永井 暁子(編)『第3回家族についての全国調査(NFRJ08)第2次報告書 第1巻：家族と仕事』(日本家族社会学会 全国家族調査委員会)、査読無、2011、55-73
- ④ 不破真紀子、筒井淳也、家事分担に対する不公平感の国際比較分析、家族社会学研究、家族社会学研究、査読有、2010、22巻1号、52-63

〔学会発表〕(計11件)

- ① J. TSUTSUI、East Asian Welfare Model and Its Discontents、International Symposium: East Asia in Transition、2012年3月24日、立命館大学(京都府)
- ② J. TSUTSUI、Work-Life Conflicts in the Public Sector Employment、International Sociological Association Research Committee on Family (RC06) Research Seminar、2011年9月12日、京都大学(京都府)
- ③ 筒井淳也、日本の家事分担における性別分離：NFRJ08による分析、家族社会学会第21回大会、2011年9月10日、甲南大学(兵庫県)
- ④ 筒井淳也、マイクロデータに対するマルチレベルモデルの適用可能性：NFRJ08による親子関係良好度の分析、第51回数理社会学会大会、2011年3月9日、沖縄国際大学(沖縄県)
- ⑤ J. Tsutsui、Changes in Agenda in Work-Life Issues in Japan: toward an effective solution to the problems of East Asian welfare system、The 1st Annual Conference of The International Association for Asia Pacific Studies、2010年11月21日、立命館アジア太平洋大学(大分県)
- ⑥ Y. Asai, M. Masaaki, J. Tsutsui、What Makes Wives Do More Housework in Some Countries and Less in Others? Complementary Relationships in Couples' Housework、European Population Conference、2010年9月4日、ウィーン(オーストリア)
- ⑦ J. Tsutsui、The Transitional Phase of Mate Selection in East Asian Countries、XVII ISA World Congress of Sociology、2010年07月12日、ヨーテボリ(スウェーデン)
- ⑧ Y. Asai, M. Masaaki, J. Tsutsui、Relationship of Couples' Housework in 17 Countries、2010 Annual Meeting of Population Association of America、2010年4月17日、ダラス(米国)
- ⑨ J. Tsutsui、Changing Agenda in Work and Family in Japan、International Workshop: Work and Family in Korea and Japan、2010年3月18日、立命館大学(京都府)
- ⑩ J. Tsutsui、Asymmetric Mixture: Determinants of the Attitude toward Inter-marriage in Japan、The 3rd Gendering Asia Network Conference、2009年5月29日、ヘルシンキ(フィンランド)
- ⑪ T. Tuukka, J. Tsutsui、H. Shibata、

Is there a Plan B?: How Transitioning Students at Japanese Universities Perceive Risks in Working Life and How They Plan to Manage Them、SCARR conference “Managing the Social Impacts of Change from a Risk Perspective”、2009年4月17日、北京(中国)

[図書] (計3件)

- ① 水落正明、朝井友紀子、筒井淳也、「結婚願望は弱くなったか」、佐藤博樹・永井暁子・三輪哲編著『結婚の壁』、2010、勁草書房、97-109
- ② 筒井淳也、「結婚についての意識のズレと誤解」、佐藤博樹・永井暁子・三輪哲編著『結婚の壁』、2010、勁草書房、110-128
- ③ J. Tsutsui、Asymmetric Mixture: Determinants of Attitudes toward Intermarriage in Japan, in Makiko Iwatake (ed.) Gender, Mobility and Citizenship in Asia, Renvall Institute Publications, 2010, 273-293

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

[その他]

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

筒井 淳也 (TSUTSUI JUNYA)

立命館大学・産業社会学部・准教授

研究者番号：90321025